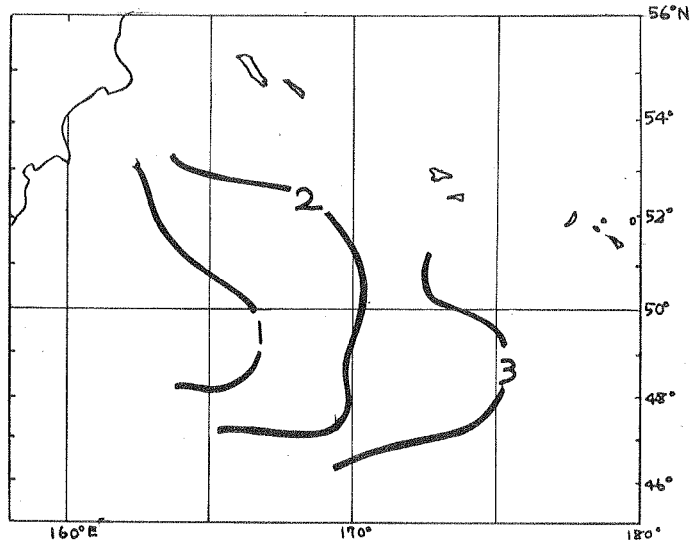
3. 昭和４４年度北洋中央漁場の操業結果

日　高　敏　雄（大洋漁業株式会社）

はじめに

本年度の中央漁場の操業は、例年になく特徴的な事が多い。漁期当初の漁場形成の北偏及び異常低温で経過した海況など考え合せると、特に漁期前半に於いて著しい。このような推移の中には漁期が全般的に遅れていた傾向にあり、漁、海況及び気象条件の特徴的なことを概略述べて、その結果から関連性について検討してみた。

第１図は表面水温の等温線を漁期中通じて合成したもので１，２，３で表示している線上に漁況の推移が位置するということから漁況の説明上とりあげた。



第１図　漁期間中における平均的な表面水温分布

操業結果

漁期前期（５月下旬～６月上旬）

漁況：主漁場は５１°N 以北１７０°E 以西のべにざけ漁場である。２℃台の水帯に漁場が形成されたが過去に例のないことである。図の１，２線上に分布が厚かつたが、６月上旬の前半になると分布も薄くなり、後続群もなく、これは東カム系群と思われる。６月上旬は漁場も南偏・東偏し船団の移動があつたが、南漁場でべにざけの4_2才魚が昨年より多く出現していた。

海況：４５°N、１７０°E付近まで冷水帯の張り出しがみられ勢力も強いものであつた。中央漁場は、２～３℃台の水帯で昨年より１～1.5℃も低目であつた。

気象：オホーツク海高気圧の停滞及び南東進がみられ、低気圧は漁場の南海域を通過するものが多かつた。

漁期中期（６月中旬～６月下旬）

漁況：主漁場は５０°N以南に形成された。図の３の線上に当るが、カラフトマスの分布も厚くなり、ベニザケ・シロザケ・カラフトマスの混獲であつた。下旬になると、船団の移動も活発になり中央漁場は２～３の船団を残すのみとなつた。この時期の特徴としては、ベニザケにおいて昨年より未成魚の割合が多くみられたことであろう。

海況：一時昇温の傾向がみられたが、中旬の中央漁場で発達した低気圧の為か昨年より１～２℃も低目に経過しており、又西方からの冷水帯の勢力も一向に衰えず本年度の海況の特徴を徹底的なものにしていると言える。しかし下旬になると天候も安定し、昇温著しく略昨年並の７℃の水帯になつた。

気象：６月１６日頃９８０mb の低気圧が中央漁場で発達し大時化に見舞われたが、この低気圧通過後は天候も安定した。

漁期後期（７月上旬～７月中旬）

漁況：水温の上昇と共にカラフトマスの分布も厚くなり、漁場は、アッツ島周辺のカラフトマス漁場と、コマンドルスキー島南海域のベニザケ漁場に２分される。後半は小型ベニザケの分布に変つたが昨年と比較して 4_2 才魚の割合および未成魚の分布が多かった。

海況：昇温著しく昨年より高目に経過している。特に切揚げ前は沿岸寄りで２～３℃も昨年より高い。しかし冷水域はこの時期になつても残つていた。即ち漁期中通して何らかの形で形成されていたと言える。

気象：好天に恵まれた。

漁・海況及び気象の概略は以上のようである。漁期の遅れ、昇温の遅れなど全般的にみて中央漁場は漁期が遅れたという感が強く、特に漁期前半に顕著であつたと思われる。これに関連ある現象として次に述べる事項が言えると思う。

漁況→漁期前の来遊状況及び中部域の分布状態からみても、5_3 才魚の例年より遅い出現、5_2 才魚の遅くまで中部域に滞泳していたことなど関連ある現象と思われる。魚体組成の分布状態からみても、昨年より時期的・場所的な偏差がある。

海況→冷水帯の勢力強く漁期後半まで衰えなかつた。このことが漁場形成、強いては漁期の遅れにも影響したと思う。

漁期前半は昨年より１～２℃も低目に経過した。

例年なら６月上旬後半から中旬にかけて昇温がみられるが、１旬位おくれて昇温した。

気象→昨年に比較して風力は稍々強かつたが気圧配置からみれば好天に恵まれていたと言える。後半天候も安定し、低気圧は南海域を通過する事が多かつた。高気圧の出現が昨年より約２０日遅れていた。

操業結果からみて感ぜられた漁期の遅れという事に関連ある現象を上にあげたが、その主たる要因

は何かこれからの検討事項である。漁況に及ぼした要因は以上述べた中にも含まれているかもしれない。これらは今後の課題として今回は実際洋上で感じた事を述べ、操業報告としたい。

4. 昭和４４年度母船式サケ・マス漁業のベーリング海における漁海況

吉　村　寿　洋（日魯漁業株式会社）

はじめに

昭和４４年度に於ける母船式サケ・マス漁業の船団操業を通してベーリング海に於ける気象、海況、漁況について概略報告する。母船式さけ・ます漁業に於いては、一般的に言つて、漁期前半にはベニザケ魚群の捕捉を目的として漁場選定を行ない、漁期後半にはシロザケ・マス・ギンザケ魚群をその目的として漁場を選定しているのが現状であるが、これとてあく迄基本的な考え方であつて、シロザケ・マスを対象とした操業であつても、よりベニザケの混獲の高い方に偏向する場合、又その逆といつた場合がある。

更に近年の傾向としては、漁期前半の５月下旬～６月中旬頃のベニザケ対象とした操業に続いて、６月下旬以降シロザケを対象とするベーリング海に於ける操業の比重が大きくなつている。

海況としては各半旬別に於ける表面水温のみとりあげ、魚群の分布状態については船団が操業した範囲内で見られた傾向を示す。期間については当該海区に於ける船団の操業は大体６月下旬に始まり６月末～７月上旬にかけて盛漁期を迎えるのが近年の大体の傾向であるので本報告に於いても６月下旬より切揚迄を対象とした。

(1) 気象の概略

(2) 各半旬別に於ける海況と操業海区との相関

(3) 船団操業海区で漁獲された魚群の分布状態と生物学的特徴

をとりあげこれについて述べる。

本　　論

(1) 気象について

昭和４４年度の気象状況としては漁期前半においてはオホーツク海からベーリング海西部にかけて高気圧で覆われ、４０°Ｎから４５°Ｎ附近に低圧部があり、これに沿つて低気圧の通過が多く中央漁場アリューシャン列島南漁場ではこの影響により船団休漁という事態も見られた。漁期後半の６月中旬には三陸沖に発達した低気圧がカムチャツカ南東海上を東進し、アリューシャン列島を境として